復活節第7主日（昇天後主日）　2011/6/5

聖ヨハネによる福音書第17章1～11節

於：聖パウロ教会　司祭　山口千寿

先週の木曜日は、昇天日の祝日でした。復活したイエスさまが40日にわたって弟子たちに姿を現し、神の国について教えられた後、オリブ山から天に昇られたことを、朝の聖餐式で記念し祝いました。あいにく雨降りだったので、イエスさまが青空の中を、天高く昇って行かれるお姿を想像するには条件が良くありませんでしたが、それでも、手を上げて弟子たちを祝福しながら天に昇って行かれた、というルカ福音書のみ言葉を心の中に留めました。そしてイエスさまの祝福に応えて、弟子たちもまた神殿にあって神さまをほめたたえていたという、信仰の喜びに生きる弟子たちの姿を思い描きました。

神さまをほめたたえる、賛美するという言葉は、神さまを祝福するということです。イエスさまが弟子たちを祝福されたのに応えて、弟子たちも神さまを祝福したのです。わたしたちは、祝福というのは受けるもの、祝福はいただくものであると思い込んでいるところがありますが、感謝して素直にいただいて、それで終わりにしてしまって良いのではありません。祝福をお返ししなければなりません。

神さまをわたしたちが祝福するなどということは、何かおこがましいことであるかのように感じられるかもしれませんが、祝福するという言葉の元々の意味は、良い言葉を語るということです。相手にとって良いことがあるように祈り、願うことです。そして、神さまは祝福を現実のものとするために力を現してくださいますが、人間にはそのような力はありませんから、せめて言葉だけででも言い表すことが、神さまの祝福に対する人間の応答の行為でありましょう。それが神さまをほめたたえる、賛美することです。弟子たちはそのようにしてイエスさまの祝福に応えたのです。神さまへの良い言葉を語ったのです。

信仰の交わりは、お互いに良い言葉を語り合うことです。祝福し合うことです。わたしたちは、ほかの人のことを批判的に見たり悪口を言ったりすることが、ついつい先に立ってしまうことが少なくないと思います。そうすることが必要な場合もあるかもしれません。自分が傷つくことを覚悟して、相手のためを思って真心から忠告することもしなければなら

ないでしょう。しかし何よりもまず第一に、祝福の言葉を語ることができるようになること、それが、わたしたちがイエスさまの弟子であることを表すことになるのではないでしょうか。

イエスさまは、天に昇って行かれる時を前にして、弟子たちにエルサレムに留まり、父が約束されたものを待ちなさい、高い所からの力に覆われるまで、都に留まっていなさい、聖霊によって洗礼が授けられるのを待ちなさいと命じられました。

今日の主日は、イエスさまの昇天によって弟子たちだけが残されてしまい、未だ聖霊の降臨の出来事が起こらない状態の中で、弟子たちが助け主の到来を待ち望んでいる期間に当たります。特祷でも、「どうかわたしたちをみなしごとせず、聖霊を降して強めてください」と祈りましたが、弟子たちは慰め主を必要としました。イエスさまが天に昇って行かれた今、イエスさまに代わって、別の形でもって励まし支え、勇気と力を与えてくださる方がおられなければ、弟子たちは自分たちでは何もできないことを、重々分かっていました。

十字架の場面で、イエスさまを裏切り逃げ出してしまった弟子たちです。自分でも呆れ返ってしまうような頼りない、当てにならない者たちです。弱さと破れを負ったまま生きるほかない人間です。それでも尚、イエスさまの弟子として生きるためには、上からの力が与えられなければなりません。

昇天日から朝の礼拝の旧約日課は、エゼキエル書を読んでいます。エゼキエルが預言者として召命を受け、その使命に遣わされる物語です。神さまがエゼキエルに呼びかけます。「自分の足で立て」と命じられます。そして霊がエゼキエルの中に入って、彼を自分の足で立たせるのです。

エゼキエルは預言者としての務めを喜んで引き受けたのではありません。自分の遣わされる相手は、神さまのみ言葉を聞こうとはしない反逆の民です。迫害を覚悟しなければならないという、厳しく苦難の多い職務です。しかし、神さまの御手にしっかりと捕らえられて、そこから逃れることはできなかったのです。いわば強制的に預言者として立たせられました。しかし、神さまはエゼキエルを厳しい状況に放置されたのではありません。「恐れ

てはならない、たじろいてはならない」と励まし、み言葉を口に入れ、額をダイヤモンドのように硬くして敵から守ってくださるのです(『旧約聖書注解Ⅱ』)。

人を立たしめるのは神さまの霊です。弱さと破れを負った人間を見出して、神さまの働きのために用いようとなさるのです。イエスさまは弟子たちのことを良くご存知でした。それで、弱い弟子たちのことを心の中に留め、父なる神さまに執り成しの祈りを捧げてくださったのです。弟子たちが、イエスさまの栄光を現すためです。直接の弟子たちだけではありません。弟子たちの言葉を聞いて、イエスさまを信じるようなったわたしたちのことをも、祈っていてくださるのです。

今日の福音書は、古来より大祭司の祈りと呼ばれている箇所です。昇天後主日には、A年、B年、C年いずれもヨハネ17章のこの大祭司の祈りを、それぞれ3つに区分けして読むことになっています。ヨハネ福音書は、13章からイエスさまが弟子たちと最後の晩餐を共にし、その席から立ち上がって弟子たちの足を洗い、そして別れの説教をなった記事が続きます。その締めくくりに、17章の大祭司の祈りが記されています。

その内容は、①始めに、イエスさまがご自身の栄光のために祈ります(1～5節)。②次いで、残される弟子たちのための祈りが続きます(6～19節)。③そして、全教会のため、教会一致のための祈りで閉じられます(20～26節)。今日の福音書に選ばれているのは、イエスさまがご自身の栄光のために祈られた所と、残される弟子たちのことを父なる神さまに守ってくださいと、お願いしている箇所です。

ヘブライ人への手紙には、この大祭司であるイエスさまのことが描かれていますが、次のように記されています。「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているので、無知な人、迷っている人を思いやることができるのです。キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、ご自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました」(4:15,5:2,7)。

イエスさまは、スーパーマンではありませんでした。この世の中を生きて行く人間の悩みなどからは超然として、一人、悟りきってこの世を超えた高い所に立って、哀れな人間の世界を見下ろしておられたのではありません。そうではなく人間の営みの最も低い所、底辺にまで身を屈めてくださったのです。人となられ、人間がこの世の旅路を辿る時に舐めなければならない辛苦を、誰よりも深く体験されたのです。一粒の麦として地に落ちることを自ら引き受けられたのです。だから、弟子たちのことを思いやる心に深く生きることがおできになったのです。

同時に、この世に埋没して生きられたのでもありません。常に目を父なる神さまのおられる天に向けて祈ることをなさいました。今日の福音書の最初にも、「天を仰いで言われた」とありますが、祈りの内に父なる神さまと対話することを欠かさなかったのです。ただ単に言葉を交わしたということだけに留まりません。父なる神さまとの交わりがあるから、命の交流があるから、その交わりの中で一つとなって上からの命を生き抜かれたのです。

「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたがお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」とありました。神さまを知る、イエスさまを知る、それは知識を蓄えることではありません。イエスさまに愛されていることを知ることです。神さまに愛されている喜びに生きることです。神さまとイエスさまに愛の絆によって一つに結ばれている、その喜びがわたしたちを生かすのです。その時、わたしたちも神さまの霊によって立たしめられるのです。永遠の命の喜びにあずかるのです。

今日は、イエスさまの祝福のうちにわたしたちがあることを心に覚え、神さまに感謝と賛美を捧げたいと思います。